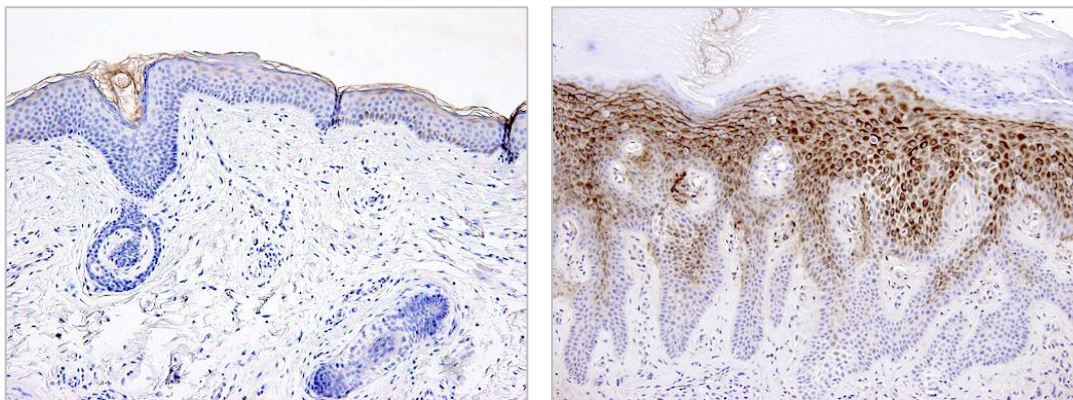


皮膚表面で産生されるペプチドのはたらきを発見

アトピー性皮膚炎、乾癬でも

京都大学大学院医学研究科皮膚科学教室の梶島健治教授、仲野祐里研究員、香川大学医学部皮膚科学の大日輝記教授らは、理化学研究所、シンガポール A*Star との国際共同研究で、アトピー性皮膚炎の体表で大量に産生される C10orf99 ペプチドが、皮膚のバリアを低下させること、さらに炎症をおこしやすくすることを発見し、研究成果を国際学術誌に報告しました。

アトピー性皮膚炎や乾癬などの慢性の皮膚炎では、皮膚表面の「表皮」と、皮膚の免疫細胞との間に悪循環がおこって、炎症が慢性化していると考えられています。京都大学皮膚科学の梶島健治教授、香川大学皮膚科学の大日教授らの研究チームは、C10orf99 というペプチドが、これらの皮膚炎で共通して、表皮の体表近くで大量に産生されることを見つけました。さらに、C10orf99 ペプチドは皮膚のバリア成分の産生をへらすこと、また、C10orf99 ペプチド自体が炎症をおこす作用をもつことを発見しました。



皮膚組織での C10orf99 ペプチドの産生の様子(茶色の色素で染色)。健康な皮膚では目立たない(左)。アトピー性皮膚炎の皮膚では、体表に近い部分で C10orf99 ペプチドが大量に産生される(右)。

<論文タイトルと著者>

タイトル：C10orf99/GPR15L Regulates Proinflammatory Response of Keratinocytes and Barrier Formation of the Skin (C10orf99/GPR15L 経路はケラチノサイトの炎症反応やバリア形成を制御する)

著者：Teruki Dainichi, Yuri Nakano, Hiromi Doi, Satoshi Nakamizo, Saeko Nakajima, Reiko Matsumoto, Thomas Farkas, Pui Mun Wong, Vipin Narang, Eiryō Kawakami, Emma Guttman-Yassky, Oliver Dreesen, Thomas Litman, Bruno Reversade, and Kenji Kabashima

掲載誌：Frontiers in Immunology

DOI：10.3389/fimmu.2022.825032